

國學院大學學術情報リポジトリ

The Editing Process of Hirata Atsutane's Senkyo ibun : Between Narrative and Writing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Endo, Jun メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000491

平田篤胤『仙境異聞』の編成過程

— 〈語り〉と書物のあいだ —

一、はじめに

平田篤胤の『仙境異聞』は、高山寅吉が「七歳の時より、幽界に伴はれて、十四歳まで、七箇年の間、信濃国なる浅間山に鎮り坐る、神仙に仕はれたるが、其間に親しく見聞せる事どもを、師「篤胤」が親しく見聞せる事どもを、師の自ら聞糺して、筆記せられたる物」(「大壑平先生著撰書目」とされる書物である^①)。

最近、その『仙境異聞』が世間をにぎわしている。二〇一八

遠藤 潤

年二月中旬のwriter上の投稿が発端となつて、当時品切れ状態だった子安宣邦校注の平田篤胤『仙境異聞・勝五郎再生記聞』(岩波文庫)の需要が急速に高まり、同書は重版を重ねたのである。同年の八月には、山本博訳・武田崇元解説『現代語訳仙境異聞付・神童憑談略記 七生舞の記』(八幡書店)、十二月には今井秀和の訳・解説による平田篤胤『天狗にさらわれた少年 抄訳仙境異聞』(角川書店)がそれぞれ刊行されている。子安による翻刻は、内外書籍刊行の『平田篤胤全集』第八卷(一九三三年)所収の翻刻を底本としたものである^②。内外書籍版『平田篤胤全集』の底本は、その解題には「平田家所蔵の写

本」とだけあるが、国立歴史民俗博物館『平田篤胤関係資料目録』（同館、二〇〇七年）によれば、気吹舎藏の「仙境異聞 上」「仙境異聞 下」（国立歴史民俗博物館「平田篤胤関係資料」八―五―五―一・二、以下「平田篤胤関係資料」の資料番号を表記する際には「歴博「資料番号」」の形式で略記する）がこれにあたるという。今回、あらためて現物を確認したが、この判断は正しいと思われる。この書籍は七巻二冊からなり、複数種ある清書本のうち、実質的な完成形態を示している。他の諸本と区別するため、以下本稿では「気吹舎清書本「仙境異聞」」と略記する。気吹舎清書本「仙境異聞」の上冊は「仙境異聞一之巻」、「仙境異聞二之巻」、「仙境異聞三之巻」の三巻からなり、下冊は「仙童寅吉物語一之巻」、「仙童寅吉物語二之巻」、竹内孫市「神童憑談略記」、「七生舞の記」からなる。

ところで、内外書籍版『平田篤胤全集』や『新修平田篤胤全集』に所収されている「仙境異聞」を一読した者は、そこに書物としての形式上、不可解な点がいくつもあることに気づくだろう。すぐに目につくだけでも、以下の諸点をあげることができ。すわなち、上冊終わり近くでは、独立性のある「越谷降臨の記」が挿入されている（『新修平田篤胤全集』九、四九〇―四九二頁）。上冊末尾には、山崎美成「平児代答」の跋文「文

政三年庚辰の冬かみな月九日 山崎美成」と奥書「右平児代答本文竝頭書共令清書畢／文政六癸未年三月 平篤胤「花押」」が記されている（同、四九五頁）。上冊の「一之巻」冒頭、下冊の「仙童寅吉物語一之巻」冒頭、同じく下冊所収の「神童憑談略記」冒頭に、それぞれ寅吉の履歴に関する記述があり、対象とする時期が重なっている。「神童憑談略記」は篤胤の著作の要旨を記したとされるが、「仙境異聞」本文にはない内容が含まれている。また、下冊末尾には、屋代弘賢が松村完平「嘉津間答問」に寄せた端書と松村による奥書を掲載している（同、六〇四頁）。いずれも、底本である気吹舎清書本「仙境異聞」に見られる特徴である。これらの諸点は、実は「仙境異聞」が書物として成立してきた過程に起因する痕跡であって、その背後にある編纂史を解明する端緒となるものである。具体的には、いくつかの史料からわかる事実と諸本の比較検討などによって、その理由がある程度は明らかにすることができる。

「仙境異聞」の諸本について、近年、基本的な書誌調査にもとづく成果を世に問うたのは中川和明である⁵⁾。本稿では、この中川の研究を前提としつつ、主要な諸本の構成の再検討や一部史料に見える事実関係の検証などによって、「仙境異聞」が書物として成立した過程について新しい理解を示したい。

二、寅吉に関する諸本の成立

「仙境異聞」において「語り手」とされる高山寅吉だが、仙境やその世界での存在などに關して寅吉の語りを記録したものは、篤胤自筆稿本「仙境異聞」(歴博 八一五—七—一〇三)、氣吹舎清書本「仙境異聞」における篤胤の記述のほかに、山崎美成「平兒代答」(文政三年十一月九日奥書)、松村完平「嘉津問答問」(文政三年十一月十二日)、竹内孫市「神童憑談略記」(文政四年四月、氣吹舎清書本「仙境異聞」所収)、「天狗小僧奇談」(著者・成立年とも不詳)などがある。

また、寅吉の事蹟や諸氏の聞き取りに應じる経緯については、右の「平兒代答」、「嘉津問答問」、氣吹舎清書本「仙境異聞」上冊の「仙境異聞一之卷」、氣吹舎清書本「仙境異聞」下冊の「仙童寅吉物語一」、同冊所収の「神童憑談略記」、「天狗小僧奇談」などにそれぞれ記載があり、重複はもちろんのこと、ときに相互に齟齬がある。また、諸本における記載のほかに、氣吹舎の諸日記(本稿では総称するときは「氣吹舎日記」と呼ぶ⁶⁾)の關係記事がある。ここでは、これらの諸本や記事によりながら、寅吉の事蹟と諸テキストの成立とその性格について検討しておく。

きたい。

寅吉の語りを記録したとするそれぞれ史料には、当然のことだが、寅吉の発言の純粹な筆録になつていない箇所がままある。事蹟の説明にあつては、それらを相互に比較・検討し、適切な内容を推定していくほかない。以下、典拠は諸書に共通する場合は特に記さず、特定の文献のみに記載される事項については特記する。また必要があれば、關係の記述に対する評価についても補足する。

寅吉は、文化三年(一八〇六)十二月晦日(二十九日)に生まれた。母親によれば、年・月・日の干支が全て寅であつたとにちなんで寅吉と名づけたという。この点は「平兒代答」には言及がないが、「仙境異聞一之卷」、「仙童寅吉物語一」、「神童憑談略記」が記すところである。「仙境異聞一之卷」はさらに時刻も寅だつたとする。この点を篤胤自筆稿本「神童憑談略記」で見ると「文化三寅年十二月晦日「挿入」の朝七時」に生れたるが、その年も日も「挿入」刻も「寅なりし故に、かく名づけしとぞ」と後から挿入によつて補つたことが確認される。越中屋与惣次郎の次男として生まれたが、この寅吉の生地については、「平兒代答」は「下谷池の端七軒町なる庄吉といふもの、弟」という形で記し、「神童憑談略記」は「江

戸の根津七軒町なる、越中屋与惣二郎といひし者の二男」、篤胤自筆稿本「神童憑談記／仙境異聞」や「仙境異聞一之巻」では「江戸下谷七軒町」とあり相違する。この時期に「根津七軒町」なる町名はなく「池の端七軒町」と「下谷七軒町」は実在する。他の箇所の記事との地理的整合性の点から「池の端七軒町」の方が適切だと考えられる。「池の端七軒町」は、根津に隣接しているので「根津七軒町」と誤認した可能性も想定できるが、篤胤自筆稿本までが「下谷七軒町」としている点は今のところ理由が不明である。

文化九年、寅吉が七歳のとき、池之端の境神社の卜筮者に入門を断られた後に、五条天神で薬売りをしていた老人に誘われて仙境への出入りが始まった、という。寅吉は、師(杉山僧正、あるいは杉山山人)にしたがって岩間山を中心とした山内での修行の日々を送り、史料によつて異なるが、父の死と前後して禅宗や日蓮宗の寺院に弟子入りをした。文政二年(二八一九)五月に師が来訪したことを機会に再び岩間山に入り、同年秋にいったん自宅に帰ったものの、ほどなく山中に帰つて修行の日々を過ごした。文政三年三月二十八日に自宅に戻ったのち、九月七日から山崎美成宅に身を寄せていた。十月一日に篤胤と屋代弘賢が美成宅を訪問して寅吉と初めて対面した。十月十一

日に美成が寅吉を初めて篤胤宅に連れてくるが、同月十七日に寅吉は杉山山人の許に旅立った(「仙境異聞一之巻」)。その後、十一月二日の夜中、寅吉は篤胤宅を突然訪れ、そのまま篤胤宅に滞在して、さまざまな人々と対面して仙境などについての対談をすることになる。この対談の記録をもとにして成立したのが「仙境異聞」である。

三、山崎美成「平児代答」

山崎美成は寅吉が美成の許にいた文政三年十月九日の事蹟までを記録して、十一月九日までに「平児代答」という書物にまとめた(同書奥書)。同書は末尾に、杉山山人が所持した剣、さまざまな図を記載している。気吹舎清書本「仙境異聞」上冊所収の「仙境異聞三之巻」の末尾に掲載された図は、実はこの美成による図を転載したもので、さらに美成の奥書も載せている。「仙境異聞三之巻」の文中に唐突に美成の奥書が登場するのはこのことが理由である。そのあとに「右平児代答本文並頭書共令清書畢 文政六癸未年三月 平篤胤「花押」とあるので、文政六年三月に篤胤が筆写した「平児代答」がその後「仙境異聞」の編纂過程の途中でここに所収されることになったと考え

られる。「仙境異聞」の執筆者あるいは編纂者は、この書の編成には美成による図が自らの記述に有益だと判断したのであるう。

「平兒代答」と「仙境異聞」の関係については、すでに岩松宏典による論考がある⁽⁸⁾。岩松は「平兒代答」と「仙境異聞」を比較して、「仙境異聞」とは『平兒代答』における寅吉の言説を自己の幽冥観に添うように変容させていく作業の記録であり、主観的で恣意的な、篤胤の他の著作と変わることの無い方法論の結実なのである」という理解を示し、さらに「言ってみれば、篤胤が脳裏に描いた幽冥界こそが先にあり、寅吉の言説は後からそれに付随するものであったのではないか。だからこそ付属物である寅吉の言説は『平兒代答』の時と比べていかようにでも変わりうるものでなければならず、そう考える限りにおいて、一般に聞き書きとされる『仙境異聞』もまた一個の篤胤の思想の体現といえるのである」と述べている。篤胤が「平兒代答」を利用して「仙境異聞」を編成したことやそこでの篤胤の方法論の特徴についての先駆的かつ重要な指摘である。ただ、「仙境異聞」には寅吉が美成の許を離れて篤胤の家に身を寄せた時期の記述も多く含まれているので、「平兒代答」と「仙境異聞」の比較のみを根拠に「仙境異聞」における篤胤の主観

性や恣意性を指摘するのは、今日公開されている史料群に照らすならば十分とはいえない。

四、松村完平「嘉津問答問」

次に松村完平「嘉津問答問」についてとりあげよう。文政三年十一月十日と十一日の両日、すでに篤胤の許に身を寄せていた寅吉は、篤胤のほか、伴信友、竹内孫市(篤胤の門人、後述)、大國隆正、守屋稲雄、岩崎吉彦、松村完平らと篤胤宅にて面談した。大坂道頓堀に住む松村完平は、篤胤に入門するために江戸の篤胤宅に来ていたところ、ちょうどこの面談に居合わせた。そしてこの二日間の記録を「嘉津問答問」(文政三年十一月十二日奥書)という書物に記した。同書の末尾には「さてかく記し畢たるを師「篤胤」に見せ奉れば、虎吉童子に説聞かされたるに、我「寅吉」が言へる事をたがえずよく書取給へれど、我ハいひたる言を物にして人に見せるやうな位のある者に非ざれば、ほぐ「反故」にし給へとて取上むとするを、己「松村」かたはらより、然もあらば人に見せじ、我一人の心得に隠し置かむとて懐にさし入れて、なほ思ふに此もまたいと高き心なりけり。」「(「内は引用者による)」とあって、完平が書

いた内容を篤胤や寅吉が知っていたことがわかる。「嘉津問答問」には諸本があるが、表紙見返しに屋代弘賢の端書を持つものが多い。もと気吹舎所蔵だった国立歴史民俗博物館蔵「平田篤胤関係資料」内の「嘉津問答問」は「七生舞の記」(歴博八―五―六一―)と合綴されている。「七生舞の記」が前に綴じられており、後の「嘉津問答問」には屋代弘賢の蔵書印「不忍文庫」がある。弘賢所蔵だった「嘉津問答問」がいずれかの時期に気吹舎に移ったと推測される。この間の事情に関して右の歴博所蔵「嘉津問答問」の内表紙の上には鏡胤自筆の貼紙がある。そこには「鏡胤云く、浪花人松村完平「一字抹消、「そ」に修正」の頃来合せたるに依て寅吉か事を「少か」を挿入」聞書せる一冊あり 屋代輪池翁その聞書にはし書して云く 寅吉岩間山 にて云々 ―――― また完平自ら聞書の後に書をへて云く さてかく記し畢たるを云々 「此も高き心なりけり」を抹消 ―――― 「同右」 右聞書「一字抹消、「に記せる」に修正」趣ハ既に前の條々に出たる事とも故「七字抹消、「こ、」に修正」省きつ」とある(「内は引用者による)。気吹舎清書本「仙境異聞」下冊所収「七生舞の記」の末尾には、右の歴博所蔵「嘉津問答問」で省かれていた弘賢の端書と完平の奥書を補った上で、右の修正を反映させた文言が

そのまま掲載されている。気吹舎清書本では、「嘉津問答問」という書名や端書類の由来が記されていないので、これらの文章が付されている意味は一見わからないが、「右聞書」すなわち「嘉津問答問」の記載は、ここに至るまでの「仙境異聞」の中ですでに記したことであるのでここでは省く、というのが趣旨であろう。清書本「仙境異聞」下冊は「七生舞の記」とこの記述で終わっていて「嘉津問答問」の本文を含まない。清書本の編纂過程のいずれかの段階で「嘉津問答問」を割愛する判断がなされたと考えられる。ただ、あえて弘賢や完平の小文を掲載したことに何らかの意図があったにちがいない。「嘉津問答問」が「仙境異聞」の編成過程においてどのように利用されたのか、今後内容の比較にもとづく検討によってある程度明らかにできると考えている。書名は「嘉津問答問」で内容は「仙境異聞」という書物がいくつか現存しているが、その理由にも関わっているのではないだろうか。

さて、寅吉はその後も気吹舎に滞在してさまざまな人々の質疑に答えていく。寅吉の事蹟を時系列で記した書には、「平見代答」や「嘉津問答問」のほかに、篤胤自筆稿本「仙境異聞」、竹内孫市「神童憑談略記」、「仙境異聞 一之巻」(気吹舎清書本「仙境異聞」上冊、所収)、「仙童寅吉物語一」(「仙境異聞」

「下冊」などがある。以下、主なものについて見ていきたい。

五、竹内孫市「神童憑談略記」

「神童憑談略記」は、文政四年四月までに篤胤の門人である竹内孫市（健雄）の著述したものである。孫市は幕府の小講請組支配で松平・石見守組だった。

孫市は「神童憑談略記」の冒頭で次のように記す。「此の一卷は、神童寅吉が事実の略記なり。然るは其物語の記録、師の草稿ありと云えども、思ふ旨ありと申されて、秘め藏して、人にも見せられざるを、予年ごろのをしえ子にて、師も殊に厚く惠る、まゝに、元来公に召仕はる、者ながら、いまだ勤むる事もなければ、常に師の許に参りて、朝夕と物学ぶにつきて、師も免されて、かの記録をも見せられ、又直に神童が物語をも聞き、かつ其常の行状をも、したしく見などして、学びの佐けとも為りたる事どもの多かるに、得捨置がたく、かつ同じ学びの徒にも、知せまほしき事どもの有るにつきて、まづ其大概を、かつく書記したるなり。なほ委しき事は、師の記されたる記録の、世に著れむ時を待て見るべし。／竹内孫市健雄記」（竹内健雄「神童憑談略記」文政四年四月、冒頭）

この記述から、まず孫市は当時幕府の配下にあつたものの無役であり、その時間の余裕もあつてか篤胤のもとで熱心に学んでいたことがわかる。そして「神童憑談略記」の執筆の経緯については、篤胤の「かの記録」を見たこと、寅吉の語りを直接聞くことがあつたこと、彼の「常の行状」を身近で見ていること、それらに基づいて「其大概」を記したことを明らかにしている。特に注目したいのは篤胤の「かの記録」である。寅吉からの篤胤の聞きが「仙境異聞」そのものであるという従来 of 理解からすれば、それは上下清書本「仙境異聞」そのものとされることだろう。しかし、現在のわれわれは気吹舎旧蔵の篤胤自筆草稿本「仙境異聞」三冊が現存していることを知っている。孫市が見たのはこの自筆草稿本のほうであろう。この史料は、その筆記状況からも上下清書本以前のものであることが推測されるが、他にも「仙境異聞」の成立を考える上で興味深い特徴を持つ。それは、この草稿本の題名に書き換えの痕跡が確認されることである。第一冊は内題に「神童憑談記」とあるが外題は「仙境異聞一」となっている。第二冊と第三冊は、内題にそれぞれ「神童憑談記 乎 仙童寅吉物語四」、「神童憑談記 乎 仙童寅吉物語三」とあつて題名の変更が直接知られる。外題はそれぞれ「仙境異聞二」、「仙境異聞三」とある。これらのこ

とから「仙境異聞」の自筆草稿本の名称は、当初「神童憑談記」だったと推測できる。孫市の著述が「神童憑談略記」という題名を持つこともこれと符合する。そして、一部が「神童寅吉物語」へと改題され、その上で「仙境異聞」へと変更されたことが推測されるのである。ちなみに、「仙境異聞三」には「越谷降臨の記」が合綴されている。

ところで、気吹舎清書本「仙境異聞」の「仙境異聞一之巻」と「神童憑談略記」の間にも興味深い関係がある。両者において日付を持つ記述について見れば、「仙境異聞一之巻」の記述は文政三年十二月三日までで終わっているのに対し、「神童憑談略記」は逆に十一月二日に寅吉が篤胤の許に戻ってきたことと翌日に篤胤が屋代弘賢にその旨を話した件の次に、文政四年三月の寅吉の修行に関わる諸事を記す。両者の収録記事について一種の分担のような状況が成立しているのである。今後、「仙境異聞」の編成過程における「神童憑談略記」の役割を検討する際には留意しておきたい点である。

さて、題名に「神童憑談」という言葉が含まれているのは、寅吉への神の憑依があり、そのことが当初は重視されたからだと考えられる。「神童憑談略記」によれば、文政四年三月五日に寅吉の憑依が発生したことがわかる。同年三月一日に篤胤は

備中松山藩主板倉阿波守勝職に式日の礼を述べるべく藩邸に赴いたが、その留守に、寅吉は上野界隈のどこかで師である老翁に会い、百日間の「テツパン」という行を十五日までに始めるよう師から命じられたという。この行は一日に米一合ずつの飯を食べる行で、他には「蕃椒」（唐辛子）一つと塩少々しか口にしない。寅吉はこの行を四日から開始するが、五日の夕方に突然倒れて寝言のようなことを言い始めた。やがて寅吉は神の言葉を述べ始めるが、篤胤は伴信友の所に出かけて留守であり、竹内孫市や家内の者たちが神の言葉にしたがって、寅吉の世話を行なった。寅吉に憑依した神は孫市に水をもらおうように言いつて、何度か水を飲んだ後に、孫市以外の人を払い、孫市と会話を交わした。神は、日頃寅吉が世話になっている礼を篤胤に対して述べたく、姿を現して礼をいうべきだがそれはできない掟なので、災難除けの札を書いて差し上げたいという。屋代弘賢にも同様の札を言いたいというので人をして呼びにやった。神は、篤胤先生は帰宅したかと聞くが、なかなか戻らず、その間、篤胤の妻おりせが神に対して、行に伴う寅吉の食事制限を緩和するように願って許された。屋代がやってきたため、寅吉に憑依した神は屋代のためにお札を書こうとし、準備が整ったときに篤胤が帰宅し、篤胤は衣服を改めて神の前に出て額づき拝

んで言葉述べる、神はお昇りになつて、寅吉はやがて平靜に戻つた。以上が「神童憑談略記」に記されたこの日の憑依である。また、寅吉の申し出によつて、同月十三日に寅吉の師の誕生の祭りを行なつた。その直会の後に寅吉が神楽の舞を舞つたが、その様子を竹内は「其体たるすべて凡ならず、神の懸りて、舞賜ふかと思ゆるばかりなり」と記す。

ちなみに、年欠三月二十二日の記録である「越谷降臨の記」(篤胤自筆草稿本「仙境異聞三」、気吹舎清書本「仙境異聞」上冊内の「仙境異聞三之卷」のそれぞれに所収)もまた憑依に関わる変性状態を記すものである。この日、おりせらの眼前で体調不良の寅吉に何者かが憑いた。聞けば、寅吉の師だといふ。師は越谷の産土神である「久伊豆様」や多くの「枉神」が来臨していることを指摘し、やがて「久伊豆様」と大半の「枉神」が帰つた後にひとり残つた「枉神」に対して「われはふとゞきなやつ、其分指置がたく、此方の法通りに行ふべし」と命じ、「枉神」が去ろうとするのに対して、「まて〜」「誠にふとゞきなやつぞ、明日八時迄に浅間山へ出べし。法通りに行ふ」と述べた。このときも篤胤は憑依の際にはその場になかつたようである。気吹舎日記によれば、篤胤は文政四年四月二日に寅吉らとともに浅間山に出かけて十三日に帰宅している。『玉禱』

四には「信濃国浅間嶽にも、此比売神「石長比売命」の坐すよし、人の普ねく云ふは実の事にて、古く社の在りけるを、去ぬる天明三年に、山の焼出たりし時に失たる儘にて、今は麓に朽たる鳥居のみ残りて、神主もなく、僧山伏など、推て己が仕ふる神のごと云ひ成し、また其の者ども、富士山の栄えを羨み、かつ此の山の神をも浅間と申すに就て、開耶姫命「サクヤビメ」なりと誣言して、人を欺くよし、去ぬる文政四年四月に、其の八日は毎も、山開きの日なるに会むとて参詣ける時に、杳掛の駅なる古老等が語りたりけり。」とある(『新修平田篤胤全集』六、二四九―二五〇頁)。「越谷降臨の記」もやはり文政四年のこの時期のことと考へたいところではある。

憑依は、篤胤にとつて重要な意味を持つものであつた。篤胤が自らの学者としての姿を重ねて其感を寄せるとされる久延彦神だが、その神について『古史伝』巻十八の中で次のように述べている。「其はまづ此に、足雖不行と云るに、上文に、召久延毘古而問之時云々と有れば、言語は更なり、召に応て、歩み参出たりとも聞ゆ。然れば此神はしも、體に固有の靈魂は無れど、他より問る、事に従ひて、神また人、或は物にまれ何にまれ、其事を知れる靈の憑託て誨ふる故に、天ノ下の事の、悉く知らるゝにて、実は曾富騰の、本より知れるには有まじく

所念たり。其は古くも今も、巫祝などの、憑人と云を立て、また人の霊を祈り憑せて、物問ふとことの有も、云ひ以て行けば、同じ意ばへになむ有ける。(中略)また此神の、天下の事を盡く知て在る由を辨へて、此を顕白せりし谷具久も、またいみじき神になむ有ける。」「〔新修平田篤胤全集〕一、三三五(三七六頁)。カカシの神である久延彦だが、それは(どこにも行かないのに全てのことを知っている)というだけでなく、(身にはもとのたましいがないが、さまざまな神や人の霊が憑りついて、いろいろなことを教えてくれる)存在なのである。篤胤は憑依によることばに対して大きな信頼を寄せており、(学問すること)をこのようにイメージしているのである。この意味で寅吉が体現した憑依は、篤胤にとって彼のことばのリアリティを強化するものであった。

六、「仙境異聞」という書名

気吹舎の有力門人に、三河の神職である羽田野敬雄がいる。敬雄は、天保二年(一八三一)に平田篤真(天保三年に鏡胤に改名)の訪問を受けた。その後、天保八年七月に「神童憑談略記」を写す(西尾市岩瀬文庫蔵)。この事情について識語に次

のように記している。

「此一巻は、平田篤真「鏡胤」ぬしのおのが許に來給へる時持來て見て給へる也。されと此事は師「篤胤」の猶くはしく問正して思ひ合さる、事のあるをば和漢の書等に考証して仙異「境の誤りカ」異聞と名つけて七巻となしつれと、いまだ草稿のまゝにてあれば、近きほどに清書させておこすへければ写しなむことはしまし待ねといはれつるを、学のはらからなる鈴木重実神主がしひてこひ申してみそかに写しおける也。さるをまたかりてものしつるになむ。」「(内の注記と句読点は引用者による。)¹¹⁾

これによれば、鏡胤は三河來訪時に「神童憑談略記」を持参し羽田野敬雄や鈴木重実に見せたこと、また当時「仙境異聞」という名称を持つ七巻の草稿が篤胤の許で成立していたこと、羽田野は、天保二年に鈴木が写していた「神童憑談略記」をさらに写して手元の写本としたことなどがわかる。ここでいう七巻の草稿は篤胤自筆草稿本にあたると考えてよいだろう。その題名変更の時期を推測させる重要な手がかりである。他方、現存する自筆草稿本が三冊であるのに対して、ここでは七冊とさ

れている点については篤胤自筆稿本の現物の再確認を含めて、今後検証する必要がある。

七、「嘉津問答問」という名の「仙境異聞」

ところで、京都府立京都学・歴史館には、伴信友の蔵書印を持つ写本「嘉津問答問」五冊がある。外題は「嘉津問答問」となっているが、内容は松村完平「嘉津問答問」ではなく「仙境異聞」のいくつかの巻であり、内題は「仙童寅吉物語」の「一」から「四」、および「附録」となっている。記述を気吹舎清書本と比較すると、信友旧蔵「嘉津問答問」の「仙童寅吉物語」一から三の内容が気吹舎清書本下冊の「仙童寅吉物語」一・二に該当することがわかる。そして、信友旧蔵書の「仙童寅吉物語四」は気吹舎清書本下冊の「七生舞の記」および書名「嘉津問答問」の由来を示す端書からなり、信友旧蔵書の「仙童寅吉物語附録」は「神童憑談略記」であって気吹舎清書本下冊にも収める。順序の違いはあるが、内容全体として、信友旧蔵「嘉津問答問」五冊は気吹舎清書本「仙境異聞」下冊に該当している。伴信友は弘化三年（一八四六）十月に亡くなるので、その蔵書印を持つ本書はそれ以前の成立であると一応考えておきた

い。

ここで注目しておきたいのは「嘉津問答問」に関わる端書の意味である。篤胤の手にあつた寅吉に関する記録をまとめたものがある段階で「嘉津問答問」の名で世に出したとすれば、その題名についての説明がその書物のどこかで必要になるだろう。信友旧蔵「嘉津問答問」の末尾に屋代の端書やそれに関わる篤胤の文章が掲載されたのにはそのような意味があつたと推測できる。その後の編成過程で題名が変更され、部分の順序も入れかわって当初の意味は見失われた。気吹舎清書本やそれにもとづく全集の翻刻での「嘉津問答問」端書の「唐突さ」はこのことに由来すると思われる。

八、「仙境異聞」の流布と編成替え

「仙境異聞」の名を冠した書物が門人たちの許に届けられるのは、いつ頃からだろうか。

実際に配本された「仙境異聞」のうち、正確な時点が確認される書物に、羽田八幡文庫本の「仙境異聞」六冊がある^③。これは、篤胤が羽田野敬雄宛に送ったものである。外題は「仙境異聞」の「一」から「五」および「仙境異聞 別巻」となってい

るが、気吹舎からの配本順序はこの順ではなく、外題も後述するように後から付けたものと考えられる。以下、配本状況について、各冊について内題で示し括弧内に外題を補う形で説明していきたい。

嘉永五年(一八五二)八月に、まず「仙童寅吉物語一之巻」(「仙境異聞 五」)、「仙童寅吉物語二之巻」(「仙境異聞 六」)の二冊が鉄胤から羽田野に送られた。「仙童寅吉物語二之巻」末尾にはそのときの覚として羽田野の朱書が記されており「これふた巻は全部今た浄書せず草稿のまゝにてあるを、かの寅吉か事のみ乎延胤に写させつれハとて鉄胤主の許より和田元亨主か彼家を訪ハれし時のたよりにつけて送りおこされたるなり／嘉永五年壬子八月 栄樹園主 羽田野敬雄「花押」とある。和田直衛元亨は吉田藩士和田肇の息子で、のち慶応二年に同藩家老、さらに明治二年に大参事となり、明治維新期の吉田藩政において中心的な役割を果たした人物であり、気吹舎日記によれば、嘉永五年七月二十七日に江戸の鉄胤を訪問している。この二冊はそのときの消息とともに送付したものだという。注意したいのは、本書が篤胤の残した草稿のうち「かの寅吉か事のみ乎延胤に写させ」たものという点である。篤胤自筆草稿本の単なる筆写ではなく、寅吉の事項のみの抄出だというのである。

これは、書名が「仙童寅吉物語」であることも関係しているのではないだろうか。嘉永六年五月には、「神童憑談略記」(「七生舞の記」)の内題を持つ二つの著述が一冊として鉄胤から羽田野の許に送られた。現状としては「仙境異聞別巻」の外題を持つものである。

この時期、この三冊が他の門人にも頒布されるようになったと推測できる史料がある。嘉永六年七月二十七日の高玉安兒宛平田鉄胤書簡がそれである。この書簡には、次のような記述がある。⁽¹⁵⁾

「先頃得御意候紀州之幽界之往来一条追々相分り、誠二奇之ぬし二御座候、倅も此度忝冊写取候間差上げ可申候、猶二編三編も追々差上可申候、右ハ有志之衆々へハ追々御写し被成候而も不苦付而ハ、兼而寅吉一件之仙境異聞掛御目中度候、近頃三冊ハ清書相成申候、筆紙料ハ式忝朱二而御座候、誰ぞへ御口入相成申まじく哉、紀州のとち御引比べ被成候へハ一段宜しく御座候」

ここに見える「紀州之幽界之往来」とは、紀州の寺沢明が仙界出入りしている嶋田幸安という人物と知己を得ていることを

指す。寺沢は天保十一年八月に気吹舎に入門した門人で、紀州藩士である。寺沢は入門以来気吹舎との書簡のやりとりと書物の購入をしていたが、嘉永五年十月三日着の鏡胤宛書簡で、当地の嶋田幸安という人物が仙人と交流していることを詳述する「問答之書」を送付してきた（気吹舎日記）。寺沢は嶋田との問答を「幽界物語」という著述として残しているが、このとき送付されたのは三ッ松誠によれば「幽界物語」第一編だと考えられるという¹⁷⁾。その後、この件に関する鏡胤と寺沢のやりとりは頻繁に行われるようになり、鏡胤は寺沢を窓口¹⁸⁾に、嶋田幸安を媒介として仙人・仙界との接触を図るようになる。嘉永六年五月三日には「幽界物語」第三編が気吹舎に届いており（気吹舎日記）、この段階で第一編から第三編までが鏡胤の手に揃ったと考えてよいだろう。

右にあげた同年七月の高玉宛鏡胤書簡では、「幽界物語」第一編の写本をまず送付し、続く二冊も追々送ると述べている。そして、それに関連して鏡胤から提案されるのが「仙境異聞」の送付である。最近、三冊の清書ができて、筆紙料が二分一朱だという¹⁹⁾。これは時期的に羽田野への配本状況と符合する。鏡胤は他言しないよう念押しをしており、限られた門人への斡旋であることが推測される。また、「仙境異聞」を「幽界物語」

と比較すると一層いと勧めている。同年十一月十八日の高玉安兄宛鏡胤書簡には「仙境異聞」について「此外二も清書可致者三冊斗り有之候。是又追々差上候様可致候。」の記述がある²⁰⁾。この時点で、続く三冊の清書と配本が予定されていたことがわかる。

このように、嶋田幸安を介した仙人・仙界との接触をめぐって鏡胤が寺沢明と文通を頻繁にしていくなり時期と「仙境異聞」が清書されて一部の門人へ配布されるようになる時期が重なっていることは、単なる偶然とは思えない。というのも、羽田野が鏡胤から「仙境異聞」の最初の写本を受けとる嘉永五年以前の嘉永二年六月に寺沢が鏡胤に対して「仙境異聞」の送付を依頼していたことが想起されるからである。寺沢への「仙境異聞」の配本を語る史料は管見の限り他に見えないので、ここではこれ以上考察を進めることはできないが、寺沢・嶋田との交渉を契機として「仙境異聞」清書が進展したのではないか、という問題意識は今後も維持していきたい。

さて、安政四年（一八五八）十一月、内題が「仙境異聞一」「仙境異聞二」「仙境異聞三」とある三冊が鏡胤から羽田野に配本された。このときのものと思われる羽田野敬雄宛鏡胤書簡から、その詳細について知ることができる²¹⁾。書簡にはつぎのようにあ

る。「一 古史伝、いろく混雜二而未出来不申。此度仙境異聞三冊差上候。写し方不宜候得共、何分取込故御有恕奉希候。扱是ハ誠ハ卷ノ次第も睨と分り候事も無之候得共、此度之ハ一二三之つもり。以前の三冊、四五六と御改可被下、尤も以前の一卷ノ初メをバ重複之所御除可被下候。」すなわち、今回配本した三冊を「仙境異聞」の一から三とし、嘉永五・六年に配本した三冊については「仙境異聞」の四から六と改めてほしいというのである。これは、気吹舎清書本に見える配列と共通している。羽田八幡文庫本には六冊に共通の様式の外表紙および「仙境異聞」の「一」から「五」および「附録」の外題がつけられた。現在われわれが目にする「仙境異聞」の構成は、この段階で初めて確定したと考えられるのである。

また、「尤も以前の一卷ノ初メをバ重複之所御除可被下候」との記述も興味深い。これは寅吉の事蹟の記事を指し、前述のように、彼の事蹟は気吹舎清書本「仙境異聞」上冊の「仙境異聞一之巻」、気吹舎清書本「仙境異聞」下冊の「仙童寅吉物語一」という複数箇所記述されている。もともと存在したテキストを利用して二段階の編成の結果、寅吉の事蹟記事は重複することになってしまった。「仙童寅吉物語一之巻」の冒頭のほうを削除してほしいというのは、その不具合を解消するため

の指示であろう。しかし、これは羽田野の手許で実行されず、また最終的な気吹舎清書本でも二種の事蹟は残されたままになった。

このように、気吹舎はいったん寅吉に関する事蹟のみを「仙童寅吉物語」としてまとめた後、嘉永六年五月から安政四年十一月の間に「仙境異聞」の構成を大きく変えた。嘉永から安政にかけて羽田野の許に届けられた右の「仙境異聞」六冊を気吹舎清書本「仙境異聞」上下二冊本と比較すると、内容的にはほぼ同一である。それゆえ、現在われわれが最もよく目にする構成―すなわち気吹舎清書本「仙境異聞」のそれは安政四年の段階で初めて確定したものと考えられるのである。

『平田篤胤関係資料目録』が指摘するように、安政五年六月七日付の鏡胤宛岩崎長世書簡には、「仙境異聞」や「幽界物語」に関連して、「先使仙境異聞之儀、何斗拝見仕候哉と御尋、これハいまた拝見不仕候」、「寅吉物語上中下・幸安物語上下ハ被見仕候」、「七生舞之記ハ仙境異聞抜書と申事兼て拝見仕候、実ニ左様ニ有之候哉、右寅吉・幸安等之物語ハ仙境異聞中ニハ無之候哉」との記載が見える。これらについて中川和明は、この時点でも有力門人でさえ「仙境異聞」の内容構成について十分な情報が得られていなかったと把握している。本稿がこれまで

説明した内容からすれば、岩崎が「寅吉物語上中下」と述べた三冊は、伴信友旧蔵「嘉津問答問」内の「仙童寅吉物語」三冊に相当し（嘉永六年までに羽田野の許に届いた三冊のうちの一冊目・二冊目に該当）、「七生舞之記」が「仙境異聞抜書」であるということ、嘉永期に鍊胤が羽田野のもとに「七生舞之記」を含む三冊が送ったときに、篤胤の草稿の抜粋であると述べたことを想起すれば、意外にも、「仙境異聞」の編纂過程のある段階をそれなりに反映したものと考えてもよいように思う。

九、おわりに

以上、篤胤が「神童憑談記」と名づけた草稿から、気吹舎清書本「仙境異聞」にいたるまでの編成過程について、史料にもとづいて私なりの理解を示してきた。最後に、検討結果をまとめた図（十六・十七頁）を参照しながら、その概略を確認することとした。

寅吉との面談に関する篤胤自筆稿本三冊は、初期は「神童憑談記」という題名だった。他方で、松村完平「嘉津問答問」が成立する。また、篤胤自筆草稿本を読んだ上で、竹内孫市「神童憑談略記」が著された。その後、松村完平の著述「嘉津問答

問」の題名を冠した「仙童寅吉物語」五冊が成立する（伴信友旧蔵本）。

嘉永五年には、羽田野のもとに鍊胤から「仙童寅吉物語」一冊が届き、翌年には「七生舞記」、松村完平「嘉津問答問」（端書のみ）、竹内孫市「神童憑談略記」をもとに一冊にまとめた書物が届いた。この時点では、これらが「仙境異聞」の最初の三冊とすることが企図されていた。他方、いずれの時期に「神童憑談記」三冊のうち二冊の題名が、いずれかの段階で「仙童寅吉物語」三・四に変更された。安政四年に、自筆稿本「神童憑談記」一冊目の内容が「仙境異聞」一冊目、右の「仙童寅吉物語」四、同三がそれぞれ「仙境異聞」二冊目、三冊目として羽田野に配本され、以前の三冊は四冊目から六冊目として扱いき直すように鍊胤から指示された。この段階で確定した構成が気吹舎清書本においても踏襲される。これが、本論考の考えた編成過程の概要である。

推測に依拠する部分もあり、全体としてはもちろん仮説の域を出ない。ただ、「仙境異聞」が複雑な編成過程を経て結晶化したテキストであることについては、ある程度説明できたのではないかと思う。気吹舎清書本「仙境異聞」を完結した書物として読むときに目につく断片的な文章たちの多くは、この段階

篤胤自筆草稿本
(現状)
(草稿本書名変更
2)

羽田野敬雄宛
(豊橋市立中央図書館蔵)

高玉安兄宛

羽田野敬雄宛

気吹舎旧蔵

書名変更の時期不明。

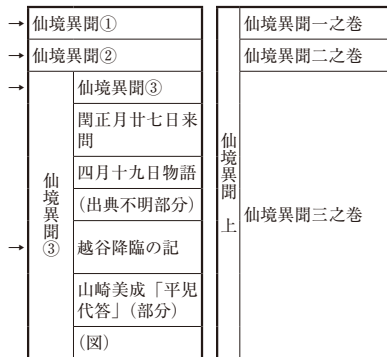
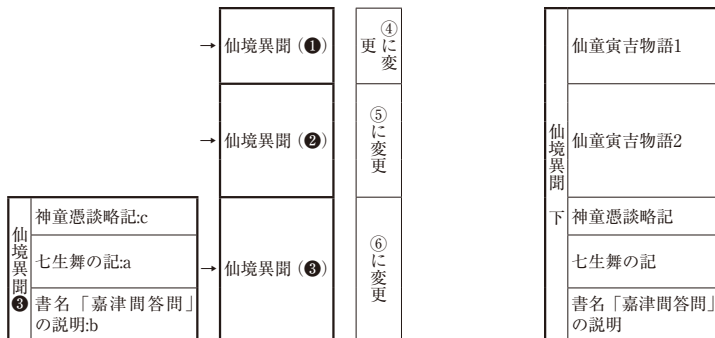
嘉永6年5月

嘉永6年11月

安政4年11月

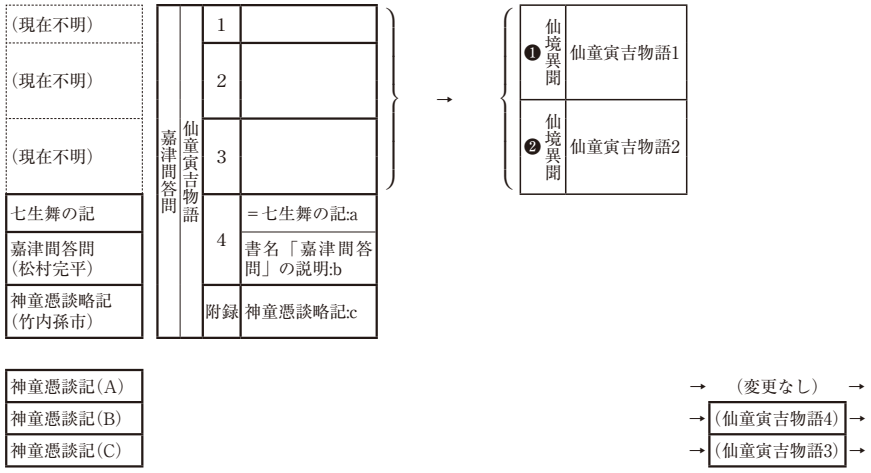
気吹舎清書本

仙境異聞3冊一
括。



【表】『仙境異聞』成立に至る編纂過程

稿本(気吹舎旧蔵)	伴信友旧蔵 (京都歴史館蔵)	羽田野敬雄宛 (豊橋市立中央図書館蔵)	(草稿本書名変更1)
文政5年成立? (「大齋君御一代略記」)	篤胤没後・ 弘化3年10月(信友没)以前	天保2年7月以前、稿本7冊成立	嘉永5年8月
	村上文庫本も同じ題名・構成。	構想(名称)としての「仙境異聞」	時期不明。 嘉永5年8月以前・以後の特定できず。



* 左から右に編纂が進行する。

的になされた編成過程に起因するものなのである。

寅吉の証言とされてきた清書本「仙境異聞」は、初期の篤胤の草稿から何次かの編成替えを経て成立したテキストであった。そもそも、篤胤の草稿にも寅吉の語りと同定できるのかという疑問が呈されている。今後、われわれはテキストの中に寅吉のことをどのように聞き取つたらよいのだろうか。

今回は、テキストの編成といういわば言説の外側からの分析に終始し、内容の分析に立ち入らなかつた。今後、多くの加筆や修正が施されている篤胤自筆草稿本の内容について詳細に読み解き、気吹舎清書本をはじめとする諸本の内容と比較すること—今後この作業を進めることによって、寅吉のことばとそれを記した諸テキストの関係をさらに深く理解することができると考えている。

注

(1) 天保五年十一月二十五日序、菅原道満(生田万)・河内盛征「大鰲平先生著撰書目」、谷省吾『平田篤胤の著述目録 研究と覆刻』皇學館大學出版部、一九七六年、七六頁。

(2) 現在のところ最新の全集である『新修平田篤胤全集』(名著出版、一九七七年)のうち「仙境異聞」の翻刻を収める第九巻は、こ

の内外書籍版『平田篤胤全集』第八巻をそのまま復刻したものである。国立歴史民俗博物館編刊『平田篤胤関係資料目録』二〇〇七年、三三九―三四〇頁。

(4) 子安校注「仙境異聞・勝五郎再生記聞」での「仙境異聞」は下冊のうち、竹内孫市「神童憑談略記」、「七生舞の記」を省いており、気吹舎清書本「仙境異聞」全体における構成の問題がやや見えにくくなっている。

(5) 中川和明『平田国学の史的研究』第七章、国書刊行会、二〇一二年。もとなとなる論文は「平田篤胤の『仙境異聞』と国学運動」『東洋文化』復刊一〇一、二〇〇八年。

(6) これらの諸本についての書誌的検討については、中川『平田国学の史的研究』を参照。本稿では、山崎美成「平兒代答」は国立国会図書館所蔵本(請求番号八四八―一五三)を基本として、西尾市岩瀬文庫所蔵本(資料番号一四〇―一九〇)、内閣文庫所蔵本(請求番号一四三―一〇六)などを参照し、松村完平「嘉津問答聞」は国立歴史民俗博物館所蔵本(歴博八―一五―一六―一)を基本として国立国会図書館所蔵本(八四八―一五三)などを参照する。

(7) 気吹舎の日常的な記録として、おおよそ把握されている日記類には以下のものがある。年次順に示す。いずれも翻刻がなされている。この他、国立歴史民俗博物館蔵「平田篤胤関係資料」をはじめ、いくつかの機関の所蔵史料には、日記的性格をもつものが含まれているが、比較的断片的なものが多いと推測される。いずれにせよ網羅的な調査はこれからの課題である。日常的に記録されている気吹舎の日記を「気吹舎日記」と総称し、便宜的に番号をつけておく。以下、丸番号がついているものが総称し、便宜的に番号のない白丸を付す。ただし、鍔胤が養子として入る以前、篤胤の活動が彼の学塾(眞管乃屋、気吹舎)の活動

そのものであったから、「文政六年平田篤胤上京日記」などは気吹舎の日記そのものである。

○文化十三年平田篤胤「かくしま日記」(国立歴史民俗博物館研究報告「一二二、二〇〇五年、所収」、①文化十四年九月～文政七年十二月「日記書抜」(渡邊金造『平田篤胤研究』六甲書房、一九四二年、所収)、○文政二年平田篤胤「二度の鹿嶋立」(国立歴史民俗博物館研究報告「一二二、所収」、②文政三～四年平田篤胤自筆日記(同右)、○文政六年平田篤胤上京日記(『国立歴史民俗博物館研究報告』「一二八、二〇〇六年、所収」、○文政六年平田篤胤上京日記(続)(『国立歴史民俗博物館研究報告』「一四六、二〇〇九年、所収」、③文政八年正月～文政十年十二月「日記第二」(渡邊『平田篤胤研究』、所収)、○文政九年平田篤胤「上総日記」(『国立歴史民俗博物館研究報告』「一二二、所収」、④文政十一年正月～文政十二年十二月「日記第二」(渡邊『平田篤胤研究』、所収)、○文政十一年平田篤胤「越後路手扣」(『国立歴史民俗博物館研究報告』「一二三、所収」、○文政十一年～天保二年平田篤胤常陸並両総旅日記(同右)、⑤天保元年平田篤胤日記(『国立歴史民俗博物館研究報告』「一二八、二〇〇六年、所収」、⑥天保二～三年平田篤胤日記(同右)、⑦天保三～四年平田篤胤日記(同右)、⑧天保五～六年平田篤胤日記(同右)、⑨天保七～九年平田篤胤日記(同右)、⑩天保十～十二年平田篤胤日記(同右)、⑪天保十二年四月～天保十三年八月「戴恩日記」(渡邊『平田篤胤研究』、所収)、⑫天保十三～弘化元年平田篤胤日記(『国立歴史民俗博物館研究報告』「一二八、所収」、⑬天保十四年～弘化元年気吹舎日記(『国立歴史民俗博物館研究報告』「一二二、所収」、⑭弘化二～嘉永二年平田篤胤日記(『国立歴史民俗博物館研究報告』「一二八、所収」、⑮嘉永三年平田篤胤秋田行日記(同右)、⑯嘉永三～安政六年平田篤胤日記(同右)、⑰慶応二～明治二年平田篤胤日記(同右)、⑱明治一～四年平田篤胤日記(同右)

(8) 岩松宏典「平田篤胤の世界観——『仙境異聞』を中心に——」『日本思想史研究』「三二〇三年。

(9) 竹内孫子「古道学弁書」文政三年三月(国立歴史民俗博物館蔵「古道学弁書」(歷博九一四一六四)。伊藤裕「大塚平田篤胤伝」錦正社、一九七三年、一三八頁。なお、無窮会神習文庫蔵写本「門人姓名録」(『新修平田篤胤全集』別巻、所収)には井上頼国による「頼云、後敵稲、吉田家ノ学士ト為ル、元来浅学ノ上、自己ノ愚説ヲ主張ス、著書見ルニ足ルモノ無シ、特ニ明治ノ始、贖金制(製)造ノ建言セルニ、既ニ贖造使用ノ嫌疑ヲ以テ、獄ニ投ゼラレル」との書き込みがある。

(10) 『平田篤胤関係資料目録』三四〇頁。

(11) 西尾市岩瀬文庫蔵「神童憑談略記」(資料番号 五二—二二八)。同書はもと羽田八幡文庫蔵であったと考えられる。

(12) 京都府立京都学・歴史館蔵「嘉津問答問」(資料番号 和二三四—二)。中川『平田国学の史的研究』一七二頁、参照。

(13) 豊橋市立中央図書館蔵「仙境異聞」全六冊(資料番号 一四七—二一三、一四七—三一三、一四七—二一三、一四七—二一三)。

(14) 家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名辞典』新人物往来社、一九八七—一九八九年。

(15) 『國學院大學日本文化研究所紀要』八九二〇〇二年。中川『平田国学の史的研究』一七二頁、三ツ松誠「嘉永期の気吹舎——平田篤胤と「幽界物語」——」『日本史研究』五九六、二〇一二年、参照。

(16) 「門人姓名録」(『新修平田篤胤全集』別巻、所収)によれば、天保十一年八月一日に「本居氏」(本居内遠)の紹介で気吹舎に入門した。入門希望の書簡は同年七月十一日に気吹舎に届いた(『気吹舎日記』)。当初、門人帳には八月とのみ記載されていたのを、寺沢は嘉永三年五月五日付鏡胤宛書簡で、朔日の日付を付加するように申し入れている。寺沢は姓を参沢、名を宗哲とも称するが、本論考では寺沢明に表記を

統一する。

(17) 三ッ松「嘉永期の気吹舎」。

(18) こうした交渉の具体的様相は、三ッ松「嘉永期の気吹舎」に詳しい。

(19) 高森町歴史資料館蔵や『青森県史 資料編近世 学芸篇六』所収の「著述書写本目録并筆紙料覚」で「仙境異聞」三巻の料金が二分二朱とされていることを中川和明が指摘している(中川『平田国学の史的研究』)。両史料とも安政五年頃のものの中川は判断しているが、後述するように安政四年十一月にはさらに三巻分の「仙境異聞」が成立しているの、そのこととの整合性を検討する必要がある。

(20) 『國學院大學日本文化研究所紀要』八九。

(21) (嘉永三年カ) 六月十八日付鏡胤宛寺沢明書簡(歴博三―一五―一三三)。「平田篤胤関係資料目録」は年欠のこの書簡について、嘉永三年のものとして推測している。さらに、中川『平田国学の史的研究』は嘉永三年と確定した上で、書簡全文の翻刻を「気吹舎日記」と照合すると、この書簡中に出てくる鏡胤書簡の日付を「気吹舎日記」と照合すると、嘉永三年ではなく嘉永二年に該当する記事があること、また書簡中の寺沢明からの送金記事に該当する収入記録を「金銀入覚帳」で確認すると、やはり相当する日付と近い金額は嘉永二年の記事に見られること、などからここでは嘉永二年と推定した。もちろん嘉永三年だとしても、羽田野への配本開始以前であり、本稿の論旨を損なわないと考える。

(22) 田崎哲郎・愛知大学総合郷土研究所編『三河地方知識人史料』岩田書院、二〇〇三年、三二六頁。中川『平田国学の史的研究』一七四頁、参照。

(23) 『平田篤胤関係資料目録』一〇二頁。書簡の資料番号は「歴博 八一―五二―四―一三」。

(24) 中川『平田国学の史的研究』一七二頁。